

バイオマス導入を拡大

包材・インキ向けなど 新ニーズに照準

大成ファイナ



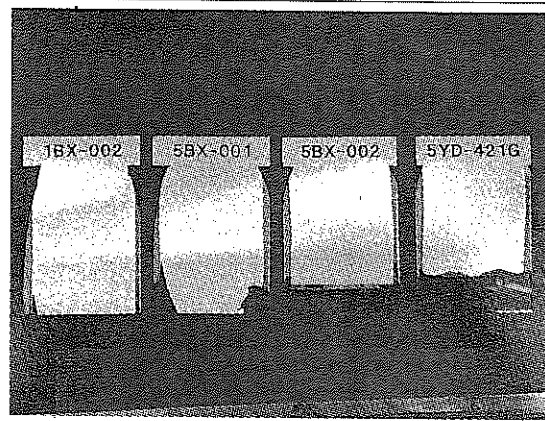
稲生社長

樹脂メーカーの大成ファイナケミカル(千葉県旭市、稲生豊人社長)は、インキ・コーティング向けのアクリル系製品を中心にバイオマス導入品を大幅に拡充した。バイオマス度50〜60%品を揃え、2025年までに年間250ト規模の販売を計画。主戦場とみる包材市場では、マテリアルサイクル(MR)に対応する脱墨インキ向けなどの新規ニーズを有力視する。また電機・電子業界でも製造プロセス全体を通じた温室効果ガス(GHG)排出量の低減が求められ始めていることから、コーティング剤にもバイオマス導入のニーズが波及するとみて採用を狙う。

インキ・コーティングのバインダー樹脂などとして多用される「アクリット」ブランドで高バイ

オマスを拡充する製品戦略をとる。21年からラビライニング用の油性アクリル樹脂「同 1BX」シリーズなど製品4品番を展開してきたが、22年末に6製品13品番へと大きく拡充。高酸価型の油性品や紫外線(UV)硬化型のウレタンアクリ

レイトなどをラインアップに加え、このほど本格展開を始めた。従来のバイオマス導入では、フィルム向けに必須のアンチプロッキング性のほかアルコール溶解性といった物性の低下が課題だった。非可食原料やパーム油の「使いこな



アクリット 5BXシリーズをバインダーに用いた白インキを塗工した試験片(中央の2つ)。アルカリ溶解が確認できる

「で実験データの蓄積が進み、樹脂設計技術が向上。飲料向けシュリンクフィルムや食品・化粧品など容器類向けのインキ・ニスに加え、建材用ハードコートでのバイオマス導入のニーズを捉える。製品構成に占める割合を徐々に拡大させ、25年には金額ベースの目標として年間1.5億〜2億円の売上高を目指す」(稲生豊人社長)計画とする。

包材市場では二酸化炭素(CO₂)などGHG排出量の低減に限らず、「MR適性」との掛け合わせが新規ニーズとなりそうだ。主な顧客となるインキメーカーは近年、ブランドオーナーらとの連携を通じて軟包装MRの早期実装を模索。一定濃度のアルカリ水溶液で除去できるインキをMRシステムに組み込む方式などが検討されている。

新開発の高酸価型アクリル樹脂「同 5BX」シリーズはアルカリ可溶性を持つことから、脱墨インキのバインダー樹脂としての利用が有力。一般にグラビティインキ用バインダーは油性ウレタン系が多いが、樹脂系の転換を含めて提案していく。もう一つ新たな動きがあるのはエレクトロニクス市場だ。末端部材を含む製造プロセス全体でGHG排出量の削減が求められ、例えばディスプレイでは、プロテクトフィルムなどにPETやポリカーボネートへのバイオマス導入が試験段階に入ったという。

大成ファイナは「基材と組み合わせるハードコート剤にもニーズが波及する」とみて、UV硬化型製品を提案。基材密着性にすぐれるウレタンアクリレート「同 8UX」など2品種を中心に採用獲得を狙う。これらバイオマス製品群の一部はコンパスターでのラインテストに移行。用途分野によっては「構成部材の一角としてカーボンフットプリントの算出が急がれる」として、検討課題をクリアしていく考えだ。